

<論文>

保育者志望学生の共感性と感情労働の関連¹

— 園での実習経験の振り返りから —

木野和代²
内田千春

1. 問題と目的

共感性は、社会的行動の背景要因として重要視される概念である。また、看護師（e.g., 加藤他, 2013）や介護士（e.g., 西村・村上・櫻井, 2015）、保育士や幼稚園教諭といった保育者（e.g., 秋政・中山・伊藤, 2009; 藤村, 2010; 三木, 2015）など主に対人援助職を中心とした職業場面においても必要な資質と見なされている。

保育に関していえば、2017年3月に改正が告示され2018年度より適用された保育所保育指針（厚生労働省, 2017）の第1章 総則において、「2 養護に関する基本的事項」として「一人一人の子どもの気持ちを受容し、共感しながら、子どもとの継続的な信頼関係を築いていく。」ことがあげられていることから、保育士には、他者に共感する能力が求められることがわかる。さらに、同指針において「4 幼児教育を行う施設として共有すべき事項」には、「(2)幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として他者へ共感するようになることがあげられている。これを受けて保育の内容でも、子どもが共感できることやそのような体験により他者とのかわりを楽しめるようにすることが求められている。子どものこのような反応を導くためには、保育者自身の共感性も求められるだろう。では、共感性は高いほどよいのであろうか。

昨今の保育現場では、女性の社会進出が進み、共働き世帯も増えたことにより、乳児保育や延長保育、休日保育などの対応が求められている。また、池本（2017）は、保育に対するニーズの多様化・複雑化で、現場の負担が増えている背景として、アレルギーや発達の遅れ、障害のある子ども、被虐待児、貧困家庭の子ども、高所得・高学歴の親の増加など多様な利用者の存在も指摘している。多様な状況の子どもと家族を受容し、共感し、寄り添うことは、大きな心理的負担が伴うと思われる。心理的負担の例としては共感疲労（あわれみ疲れ）が考えられる。保育者の場合、多様化する現場で、様々な状況にある子どもに寄り添い、子どもの気持ち

¹ 本研究は、日本社会心理学会第56回大会での発表を踏まえ、当日いただいたコメント等を考慮して執筆したものである。JSPS 科研費（課題番号JP26380943）の助成を受けた。

² 本研究で使用した感情労働尺度の邦訳に際し、福岡女子大学・准教授・鈴木有美氏の協力を得た。また本研究のデータの一部は、筆者らが鈴木氏とともに収集したものである。記して感謝申し上げます。

に共感しすぎることで、共感疲労に結びつくこともあるのではないだろうか。

共感疲労 (compassion fatigue) の概念は、看護師のみならず、医師、消防士、警察官、教師など、幅広い対人援助職で問題とされており、不幸な他者 (看護師であれば、患者) に対する深い共感や同情の感覚が、その相手との関係の中で次第に摩滅し、意欲低下を引き起こし、対人支援活動を妨げるようになることを意味する (今・菊池, 2007)。したがって、高すぎる共感性が共感疲労を招く危険性をはらんでいるといえよう。そこで筆者らは、保育者志望の学生の共感性を多角的にとらえ、共感疲労に陥りやすい／陥りにくい共感性のあり方を検討してきた (e.g., 木野・鈴木・内田, 2011)。これにより、保育者の精神的健康を維持し長期的な職場貢献を可能にするような対応策を検討・提案することを目指してきた。

ところで、近年、保育の専門性を考える視点の一つとして感情労働に関する関心が高まっている (諏訪, 2011)。感情労働 (emotional labor) とは、社会学者ホックシールドによって提唱された概念であり、「公的に観察可能な表情と身体的表現を作るために行う感情の管理」を意味する (Hochschild, 1983 石川・室伏訳 2000, p.7)。感情管理に際しては、職業上適切な感情やその表出方法を定めた感情規則が存在し、労働者はその規則に従うこととなる。そのための2種類の演技が表層演技と深層演技である。表層演技 (surface acting) とは、自らの真の感情とは不一致でも外面的には望ましい感情表出を行うこと、深層演技 (deep acting) は自らの感情それ自体を業務上望ましい感情に変化させようとするを指す。これまでの感情労働研究では、感情管理がどのように行われるかについて、これら2つの方略が注目されてきた (榎原・富塚・遠藤, 2017)。

ホックシールドは、航空会社の客室乗務員と集金人を感情労働の説明例として取り上げているが、笑顔での接客と威圧的な態度での債務者への取り立てというように両者の感情労働は正反対の極に位置するとしている (Hochschild, 1983 石川・室伏訳 2000)。保育者も感情労働を行う職業として取り上げられているが、保育者の感情労働に関する研究では、明るく元気な笑顔を示すことが求められる一方で、教育的な演技が戦略的に求められることも指摘されており (e.g., 四元・餅原・久留, 2015)、正反対の極を演じ分けることも求められている点に特徴があるといえよう。また、同じように笑顔の表出が求められる場合であっても、客室乗務員や販売員などのように瞬間的で大きなものが求められる職種もあれば、ソーシャルワーカーのように特定の顧客に対して長期に渡る深い関係が要求される職種もあり、後者の場合は、相手を気遣い共感するものの、深入りしすぎないことが求められるという (Hochschild, 1983 石川・室伏訳 2000)。保育者の職務は後者に該当すると考えられ、より複雑で、高度な感情労働であるように思われる。

このような感情労働は、前述の共感疲労と関連が深い概念である。南 (2015) は、共感疲労は、感情労働の負の側面がもたらすもの、すなわち、職務上の感情管理が求められる結果、そ

の心の負担がうまくコントロールできないことからもたらされるとしている。また、例えば、教員については、そのメンタルヘルスの現状報告の中で、新井（2014）は、学校現場における過剰な感情活用（＝感情労働）による「共感疲労」といった負担感が、教師の新たなストレスとなっていると述べている。保育者の場合も教師と同様に考えられるだろう。

そこで本研究では、保育者にとって望ましい共感性の様相を考える試みの一つとして、保育者養成課程に在籍する女子大学生を対象に、共感性のどの側面が、保育所・幼稚園実習中の感情労働経験と関連するのかを探索的に検討することとした。この際、共感性を捉えるための測度としては、多次元共感性尺度（Multidimensional Empathy Scale: MES; 鈴木・木野, 2008）を用いる。MESは、共感性の情動的所産と認知的過程の生起に関わる個人傾性を測定するものであり、認知・情動の次元に加え、他者指向性－自己指向性という指向性の弁別に焦点をあてている点に特徴があり、「視点取得」「想像性」「他者指向的反応」「自己指向的反応」の下位概念により測定される。また、情動面については応答的所産とは別に並行的所産を測定する下位概念「被影響性」を含む（下位概念間の関係については表1参照）。「視点取得」は相手の立場からその他者を理解しようとする認知傾向、「想像性」は自己を架空の人物に投影させる認知傾向、「他者指向的反応」は他者に焦点づけられた情緒反応傾向、「自己指向的反応」は他者の心理状態について自己に焦点づけられた情緒反応傾向、「被影響性」は他者の感情や意見に影響されやすい傾向を表す。

表1. MES下位尺度の位置づけ(鈴木・木野(2008)をもとに作成)

| | 認知面 | 情動面 | |
|-------|----------|----------|-------------|
| | | 並行的所産 | 応答的所産 |
| 他者指向性 | 視点取得 [5] | 被影響性 [5] | 他者指向的反応 [5] |
| 自己指向性 | 想像性 [5] | | 自己指向的反応 [4] |

[] 内は項目数

また、感情労働の心理学的測定に際しては、大きく2種類の測度が開発されている（須賀・庄司, 2008）。一つは、Brotheridge & Lee（2003）による Emotional Labour Scale（ELS）に代表されるもので、表層演技と深層演技を中心的な概念とするものである。2つの演技のほか、感情表出の頻度（frequency）、強度（intensity）、種類（variety）、そして持続時間（duration）をたずねる項目群も含まれている。もう一つは、感情労働の主要素ともいえる感情の不協和（＝演技により表現と感情が分離した結果として生じる心理的緊張状態）と感情表出の要求を主に測定する尺度であり、Zapf, Vogt, Seifert, Mertini, & Isic（1999）による Frankfurt Emotion Work Scales（FEWS）である。本研究では、感情の不協和ではなく、実習中にどれくらい演技をしていたか（についての自己認識）を把握するために、表層演技と深層演技の頻度を測定可能な Brotheridge & Lee（2003）による Emotional Labour Scale（ELS）を用いることとした。

2. 方法

(1) 調査対象者および手続き

東海地方の4年制の保育者養成課程に在籍する3年次女子大学生を対象に、縦断的に質問紙調査を実施した。対象学生はその教育課程の中で保育の講義や実技を履修するほか、1年次前期に1、2回の幼稚園・保育所訪問を、2年次6月に初めての保育所実習を、夏休み以降に2週間の施設実習を経験している。そして、3年次には、複数の演習で共感や共生などについて学ぶ機会をもち、保育所・幼稚園実習に3回(計6週間)赴くことがそのカリキュラムの中に組み込まれていた。

調査実施時期は、第一回調査が前期(2010年5月, 88名)、第二回調査が後期(2011年1月、82名)であり、両調査に回答した者は80名であった。第一回調査と第二回調査の間の9月～11月にかけて幼稚園実習(3週間)および2回目の保育所実習(2週間)が行われた(図1)。

なお、本研究で分析対象としたのは、直近の保育所または幼稚園実習期間中の感情労働に関する質問(後述)において、保育者としての人との接触時間が5時間未満と回答した2名を除いた78名であった。回答者が回答に用いた実習先は、幼稚園が77名、保育所が1名であった³。

調査用紙は講義時間を利用して一斉に配付し、その場で回答と提出を求めた。

(2) 調査内容

以下、本研究に必要な調査項目について述べる。

①多次元共感性尺度：鈴木・木野(2008)による多次元共感性尺度(Multidimensional Empathy Scale: MES)を用いた。他者指向的反応(5項目)、自己指向的反応(4項目)、被影響性(5項目)、視点取得(5項目)、想像性(5項目)の5下位尺度からなる。回答は、1=「全くあてはまらない」から5=「とてもよくあてはまる」の5件法で求めた。

第一回・第二回の両調査に含まれていたが、本研究の分析には第一回調査のデータのみを用いた。なお、各下位尺度について2回の調査間の相関係数は、.62～.76であった。

②感情労働尺度：Brotheridge & Lee(2003)によるEmotional Labour Scale(ELS)を邦訳して用いた⁴。感情表出の頻度(3項目)、強度(2項目)、種類(3項目)、表層演技(3項目)、深層演技(3項目)の計14項目(表3参照)について、平均的な実習日において、どれくらいよくあったかをたずねた。回答は、1=「全くなかった」、2=「ほとんどなかった」、3=「とき

³ 9月からの実習について回答した者は1名、11月上旬からの実習について回答した者は1名で、それ以外の76名は、10月下旬からの実習について回答した。

⁴ 関谷・湯川(2014)による感情労働尺度日本語版(ELS-J)もBrotheridge & Lee(2003)のELSを邦訳したものである。本研究における調査実施時には公刊されていなかったため、本研究では筆者らが本研究のために邦訳したものをを用いた。

どきあった」、4=「よくあった」、5=「非常によくあった」の5件法で求めた。また、持続時間(1項目)については、原文では、「通常、一人の客とやりとりする時間」をたずねるものであったが、保育所や幼稚園での実習においては回答が難しいと考え、本研究では「一日の実習で、保育士あるいは幼稚園教諭としての、人との接触時間はおよそ何時間であったか」というように、補足的に全体の時間を確認することとした。

これらについて、直近の保育所や幼稚園での実習中の経験について回答するように求めた。加えて、実習施設の種別や実習時期、期間などもたずねた。後期の第二回調査でのみ実施した。

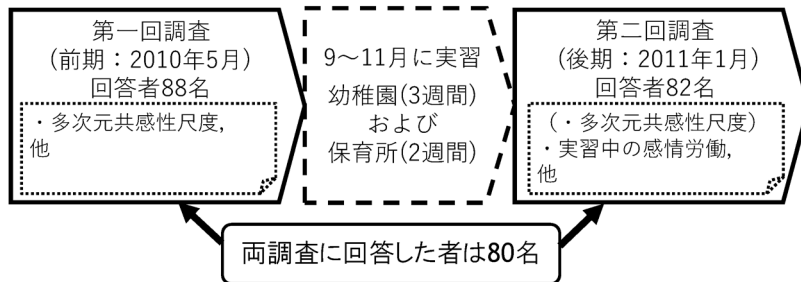


図1. 調査の流れ

3. 結果と考察

(1) 持続時間

実習中1日あたりの保育者としての人との接触時間についての回答を集計したものを表2に示す。7時間以上が大半で、87.5%であった。5時間以上と回答したのも含めると、97.5%を占めた。このうち、9時間以上10時間未満の者が約半数を占めていたことから、これらの学生は、実習中に、子どもや保護者とやりとりした時間に加えて、実習先のスタッフとのやりとりや指導を受けた時間も含めて回答している可能性も考えられた。このほか1時間、3時間と回答した者が1名ずついたが、想起した状況が他の学生と異なる可能性が考えられたため、これら2名のデータは、本研究では分析に含めないこととした。

表2. 持続時間の分布

| | <i>n</i> |
|-------------|----------|
| 約1時間 * | 1 |
| 約3時間 * | 1 |
| 5時間以上～7時間未満 | 8 |
| 7時間以上～9時間未満 | 31 |
| 9時間以上～10時間 | 39 |
| 計 | 80 |

*分析から除外

(2) 下位尺度得点の算出

感情労働尺度については、項目ごとの記述統計を表3に示した。多次元共感性尺度および感情労働尺度の各下位尺度得点の算出に際しては、原典の項目構成で評定値の合計を求めた。各下位尺度得点の α 係数を算出したところ、感情表出の強度については α 係数が著しく低かった($\alpha=.35$)。構成項目数が少ないことが考えられたが⁵、関谷・湯川(2014)の邦訳版では $\alpha=.79$ の値が得られていたことから、本研究では分析対象外とした。このほか、多次元共感性尺度の視点取得と感情労働尺度の深層演技についてはやや低かったが($\alpha=.57$)、参考のため引き続き分析に加えた。各下位尺度の平均値および標準偏差、 α 係数を表4に示す。

表3. 感情労働尺度の各項目についての記述統計量

| No. 項目 | <i>N</i> | <i>M</i> | <i>SD</i> | <i>Min</i> | <i>Max</i> | 歪度 | 尖度 |
|------------------------------------|----------|----------|-----------|------------|------------|------|------|
| 【頻度】 | | | | | | | |
| 1 仕事で必要とされる特有の感情を示す。 | 78 | 3.35 | 0.82 | 2 | 5 | .29 | -.31 |
| 4 仕事の一部として必要とされる感情を装う。 | 78 | 3.28 | 0.80 | 1 | 5 | -.41 | .56 |
| 6 仕事で求められる特定の感情を表す。 | 77 | 3.27 | 0.66 | 2 | 5 | -.08 | -.32 |
| 【強度】 | | | | | | | |
| 2 強い感情を示す。 | 77 | 2.66 | 0.75 | 1 | 4 | .28 | -.60 |
| 8 激しい感情を表す。 | 78 | 1.87 | 0.61 | 1 | 4 | .42 | 1.20 |
| 【種類】 | | | | | | | |
| 5 色々な種類の感情を示す。 | 78 | 3.40 | 0.78 | 2 | 5 | .01 | -.37 |
| 10 色々な感情を表わす。 | 78 | 3.35 | 0.77 | 2 | 5 | .19 | -.23 |
| 12 他の人とのやり取りの中で色々な感情を示す。 | 78 | 3.35 | 0.74 | 2 | 5 | -.05 | -.34 |
| 【表層演技】 | | | | | | | |
| 7 ある場面や状況についての本当の感情を隠す。 | 78 | 3.35 | 0.72 | 2 | 5 | -.20 | -.43 |
| 11 本当の感情を表わさないようにする。 | 78 | 2.97 | 0.87 | 1 | 5 | .42 | -.15 |
| 13 実際には感じていない感情を感じているふりをする。 | 78 | 2.94 | 0.86 | 1 | 5 | -.25 | -.21 |
| 【深層演技】 | | | | | | | |
| 3 他の人に見せるべき感情を実際に感じるように努める。 | 78 | 3.09 | 0.74 | 1 | 5 | -.34 | .62 |
| 9 仕事の一部として示さなくてはならない感情を実際に感じようとする。 | 78 | 3.05 | 0.74 | 1 | 4 | -.68 | .76 |
| 14 義務的に示すべき感情を実際に感じようとする。 | 78 | 2.81 | 0.77 | 1 | 4 | -.34 | -.08 |

(注) 項目中の「仕事」は、保育士あるいは幼稚園教諭としての仕事を意味することを注記した。

(3) 多次元共感性と感情労働の関連

多次元共感性(第一回調査)と実習中の感情労働経験(第二回調査)の関連を検討するために、下位尺度間の相関係数を求めた。その結果、多次元共感性の感情的な側面についてのみ、

⁵ 2項目からなり、項目間の相関は $r=.22$ であった。

実習中の感情労働経験との関連がみられた(表4)。すなわち、MES 他者指向的反応と感情表出の種類 ($r=.31, p<.01$)、MES 自己指向的反応と感情表出の頻度 ($r=.26, p<.05$)、表層演技 ($r=.33, p<.01$)、深層演技 ($r=.38, p<.001$) の間に正の有意な相関がみられた。共感性の認知的側面、および共感疲労との関連において問題視されがちであったMES 被影響性については、関連がみられなかった。なお、多次元共感性尺度の下位尺度間、感情労働尺度の下位尺度間の相関係数を、それぞれ付表1、付表2に示した。後者については、MES 自己指向的反応との正の関連がみられた頻度、表層演技、深層演技の間で、 $r=.40\sim.51$ の正の関連がみられた。

表4. 多次元共感性と実習中の感情労働に関する平均(SD)・相関係数

| | | 【感情労働】(各3項目) | | 頻度 | 種類 | 表層演技 | 深層演技 |
|---------------|----------|---------------|---------------|--------|--------|--------|--------|
| | | <i>M</i> | (<i>SD</i>) | 9.24 | 10.05 | 9.26 | 8.92 |
| | | (<i>SD</i>) | α | (1.41) | (1.84) | (1.87) | (1.66) |
| 【多次元共感性】 | <i>M</i> | (<i>SD</i>) | α | .62 | .73 | .63 | .57 |
| 他者指向的反応 (5項目) | 19.91 | (2.47) | .68 | .08 | .31** | .05 | -.05 |
| 自己指向的反応 (4項目) | 14.17 | (2.76) | .76 | .26* | -.03 | .33** | .38*** |
| 被影響性 (5項目) | 17.12 | (3.55) | .79 | .05 | -.12 | .10 | -.02 |
| 視点取得 (5項目) | 17.49 | (2.51) | .57 | .06 | .07 | -.04 | -.07 |
| 想像性 (5項目) | 18.95 | (3.22) | .69 | .05 | .05 | .17 | -.07 |

$N=76$. *** $p<.001$ 、** $p<.01$ 、* $p<.05$

次に、実習中の感情労働の各下位尺度を目的変数、多次元共感性尺度の5下位尺度を説明変数とする重回帰分析(ステップワイズ法)を行った。その結果、感情表出の種類に対しては、MES 他者指向的反応の標準偏回帰係数のみが有意となり、正の値を示した($\beta=.31, p<.01$; $R^2=.10, p<.01$)。また、頻度($\beta=.26, p<.05$; $R^2=.07, p<.05$)、表層演技($\beta=.33, p<.01$; $R^2=.11, p<.01$)、深層演技($\beta=.37, p<.01$; $R^2=.14, p<.001$)に対しては、MES 自己指向的反応の標準偏回帰係数のみが有意であり、いずれも正の値であった。これらは、相関係数の検討と同様の結果であったといえる。

MES 自己指向的反応と感情表出の頻度、表層演技、深層演技との正の関連がみられたことから、自己指向的反応傾向が高い場合、他者に起こった事柄に対して、自分自身に置き換えた感情反応をしがちであるため、実習場面において、実習生としてその場面ふさわしい感情管理を求められることも多く経験していたことが考えられる。このため、仕事で求められる感情を示すことが必要とされた頻度が高く、結果として、表層演技、深層演技で対応せざるを得なかったのではないだろうか。

他方、MES 他者指向的反応については、感情表出の種類に対してのみ正の影響が見られた。この感情表出の種類は、感情労働の他の側面、すなわち、仕事で必要な感情を示す頻度や表層演技、深層演技とは無相関であり、これらの側面とは独立したものといえよう。そして、他者

に起こった出来事に対して、他者に焦点づけられた感情反応をしがちであるほど、感じる感情の種類が多様となると考えられる。これらの生じた感情が他者指向的なものであれば、社会的にも受け入れられやすく、多様な感情を示す頻度も高かったのではないだろうか。

本研究では、共感性と共感疲労に関する検討の文脈から派生して、共感疲労に結びつく可能性をもつ感情労働をとりあげ、共感性ととの関連を検討した。共感疲労との関連では、MES 被影響性の高さも問題視されてきたが（木野他、2011）、本研究では感情労働とは関連しなかった。そして、感情労働の各側面が、MES 下位尺度のうち情動面での応答的反応とのみ関連が見られたことも興味深い。自分に置きかえて考えたり、相手の立場に立った理解をするなどの認知的な共感や、半ば自動的な巻き込まれ（被影響性）ではなく、他者の状況に対する感情反応の起こりやすさが、感情労働への従事につながる。つまり、相手の状況に応じて自分に生じた何らかの感情ゆえに、ELS で測定される感情労働のいずれかをするようになるのである。

本研究で感情労働の中核ともいえる表層演技、深層演技と正の関連がみられた MES 自己指向的反応傾向は、保育士の共感疲労とも正の関連が見られている（木野・内田、2017）。感情労働（ELS-J による測定）とバーンアウトの関連について、関谷・湯川（2014）は、2つの演技、なかでも表層演技が特にバーンアウトを予測することを示している。感情労働が職務継続において阻害要因になるのであれば、感情労働との関連からも MES 自己指向的反応は保育者には好ましくない共感反応傾向と考えられた。

なお、ここで感情労働が否定的な結果をもたらすものか否かについては、須賀・庄司（2008）は、感情労働と職務満足感やバーンアウトとの関連を検討したこれまでの研究から、感情労働が労働者に常に否定的な影響をもたらすばかりではなく、労働者の職業生活に個人的達成感を与えるなど肯定的な影響をもたらすことがあるとしている。また、感情労働と共感疲労の双方に言及した研究（土井、2014; 松田・南、2016; 南、2015）からは、プロとして感情管理ができていくことへの自負、つまり感情労働の正の側面は、共感疲労の対概念である共感満足にもつながるものであると考えられる。保育者についての研究では、神谷・戸田・中坪・諏訪（2011）が、感情労働の肯定的な側面にも注目している。保育者の感情労働と就労意識（充実感など）との関連を調査したこの研究では、感情演技（＝感情労働の自己認識）は、バーンアウトとの関連から否定的な効果が懸念される一方で、戦略的な使用が職務上有効ともなりうる両義的な側面を持つ概念であるとしている。そして、保育者としてのキャリア発達の一側面を描き出している可能性が指摘されている。したがって、保育者としてよりよい保育を実現するためのスキルとして感情労働を捉える視点から、共感性ととの関連について検討することも有意義なものとなるのではないだろうか。本研究の結果から、職務継続に向けての提言を考えるならば、自らの自己指向的反応傾向を理解したうえで、スキルとして自覚的に感情演技をするような調整案が考えられるだろう。

また、感情労働の測定に関しても、神谷他（2011）は、保育者の感情労働の測定に際して、2つの演技が自己報告式の質問紙調査で測定できるかどうかへの疑義から、感情労働に対する自己認識を感情演技として測定する尺度を作成し、これを用いて研究を進めている。今後、保育者の感情労働を検討する際には、神谷他（2011）による尺度のように、表面的な演技性を扱い、誰に対する演技かを区別できるような測度を利用することが有効かもしれない。

本研究の結果の理解に際して注意すべき点としては、第二回調査は、全員が実習から戻ったのち、授業との兼ね合いで実施可能となったタイミングで一斉に行ったため、必ずしも実習直後の測定ではなく、約2ヶ月後の実習経験の想起に基づく回答も多数含まれたことがあげられる。このため、今回の実習中の感情労働経験に関する回答は、実習後の事後指導を経て、情報が整理・再評価されている可能性がある。また、重回帰分析については、モデルの説明率が全体に低かった。この調査時期の問題がその理由の一つとして考えられる。

引用文献

- 秋政邦江・中山芳一・伊藤智里（2009）. 保育者の共感性向上のためのカリキュラム開発 —絵本を教材とした共感意欲向上カリキュラムを中心に— 川崎医療短期大学紀要, **29**, 43-48.
- 新井肇（2014）. 教師のメンタルヘルス —その実態と課題— 児童心理, **68** (12), 1-10.
- Brotheridge, C. M. & Lee, R. T. (2003). Development and validation of the Emotional Labour Scale. *Journal of Occupational and Organizational Psychology*, **76**, 365-379.
- 土井裕貴（2014）. 対人援助職におけるバーンアウト・感情労働の関係性 —精神的な疲労に着目する意義について— 大阪大学教育学年報, **19**, 83-95.
- 藤村和久（2010）. 保育士、幼稚園教諭を目指す学生のための保育者適性尺度の構成 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, **9**, 129-143.
- Hochschild, A. R. (1983). *The managed heart: Commercialization of human feeling*. CA: University of California Press.
- （石川准・室伏亜希（訳）（2000）. 管理される心—感情が商品になるとき— 世界思想社）
- 池本美香（2017）. 2040年までの保育ニーズの将来展望と対応のあり方 総務省自治体戦略2040構想研究会配付資料 http://www.soumu.go.jp/main_content/000517842.pdf（2018年3月25日閲覧）
- 加藤葉・沢佳夏子・下瀬寛子・山下千尋・雑賀倫子・吉岡伸一（2013）. 看護学生の社会的スキルと共感性の学年間比較に関する検討 米子医学雑誌, **64**, 78-86.
- 神谷哲司・戸田有一・中坪史典・諏訪きぬ（2011）. 保育者における感情労働と職業的キャリア—年齢、雇用形態、就労意識との関連から— 東北大学大学院教育学研究科研究年報, **59** (2), 95-112.
- 木野和代・鈴木有美・内田千春（2011）. 対人援助職における共感性(1) —保育者を目指す学生の特徴と共感疲労の関連— 日本心理学会第75回大会発表論文集, 906.
- 木野和代・内田千春（2017）. 保育者の共感性と共感疲労経験および精神的健康との関連 日本教育心理学会第59回総会発表論文集, 245.
- 今洋子・菊池章夫（2007）. 共感疲労関連尺度の作成 岩手県立大学社会福祉学部紀要, **9**, 23-29.
- 厚生労働省（2017）. 保育所保育指針 http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintou_jidoukateikyoku/0000160000.pdf（閲覧日：2018年3月18日）
- 松田美智子・南彩子（2016）. 高齢者福祉施設で従事する対人援助職者が共感疲労に陥らないためのサポートシステムの解明 天理大学学报, **68**, 79-105.

- 三木澄代 (2015). 保育者養成のための実習と大学生の共感性に関する一考察 環太平洋大学研究紀要, **9**, 15-20.
- 南彩子 (2015). ソーシャルワークにおける共感疲労とレジリエンス 天理大学社会福祉学研究室紀要, **17**, 15-23.
- 西村多久磨・村上達也・櫻井茂男 (2015). 共感性を高める教育的介入プログラム ―介護福祉系の専門学校生を対象とした効果検証― 教育心理学研究, **63**, 453-466.
- 榊原良太・富塚ゆり子・遠藤利彦 (2017). 子ども・保護者との関わりにおける保育士の認知的な感情労働方略と精神的健康の関連 発達心理学研究, **28**, 46-58.
- 関谷大輝・湯川進太郎 (2014). 感情労働尺度日本語版 (ELS-J) の作成 感情心理学研究, **21**, 169-180.
- 須賀知美・庄司正実 (2008). 感情労働が職務満足感・バーンアウトに及ぼす影響についての研究動向 目白大学心理学研究, **4**, 137-157.
- 鈴木有美・木野和代 (2008). 多次元共感性尺度 (MES) の作成 ―自己指向・他者指向の弁別に焦点を当てて― 教育心理学研究, **56**, 487-497.
- 諏訪きぬ(監修) (2011). 保育における感情労働 ―保育者の専門性を考える視点として― 北大路書房.
- 四元真弓・餅原尚子・久留一郎 (2015). 感情労働における概念規定の整理と展望 ―構成特徴を、看護者・介護者・保育者の立場から捉える― 鹿児島純心女子大学大学院人間科学研究科紀要, **10**, 111-118.
- Zapf, D., Vogt, C., Seifert, C., Mertini, H., & Isic, A. (1999). Emotion work as a source of stress: The concept and development of an instrument. *European Journal of Work and Organizational Psychology*, **8**, 371-400.

補遺

付表1. 多次元共感性の下位尺度間相関

| | 自己指向的反応 | 被影響性 | 視点取得 | 想像性 |
|---------|---------|------|-------------------|--------|
| 他者指向的反応 | -.18 | .25* | .54*** | .41*** |
| 自己指向的反応 | | .03 | -.22 [†] | .08 |
| 被影響性 | | | .12 | .33** |
| 視点取得 | | | | .14 |
| 想像性 | | | | -- |

N=76. *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, [†] $p < .10$

付表2. 感情労働の下位尺度間相関

| | 種類 | 表層演技 | 深層演技 |
|------|-----|--------|--------|
| 頻度 | .04 | .51*** | .50*** |
| 種類 | | -.12 | .01 |
| 表層演技 | | | .40*** |
| 深層演技 | | | -- |

N=76. *** $p < .001$

(2018年4月16日受領、2018年5月7日受理)

(Received April 16, 2018; Accepted May 7, 2018)

The relationship between empathy of students in a childcare training course and emotional labor in their internship at preschool

Kazuyo KINO

Chiharu UCHIDA

The purpose of this study was to explore the relationship of empathy of students in a childcare training course and emotional labor in their internship at preschool. Eighty female undergraduates in the kindergarten and nursery-school teacher education course filled in a self-report questionnaire twice, before and after their childcare training at preschools. The first questionnaire was the Multi-dimensional Empathy Scale (MES), and the second one was the Emotional Labour Scale (ELS). The MES consisted of five subscales: other-oriented emotional reactivity (OR), self-oriented emotional reactivity (SR), emotional susceptibility (ES), perspective taking (PT), and fantasy (FA). The ELS consisted of six subscales: surface acting, deep acting, frequency, intensity, variety, and duration. Correlation and multiple regression analyses revealed that OR was positively related to variety in ELS. On the other hand, SR was positively related to surface acting, deep acting, and frequency in ELS. These results will contribute to future research on compassion fatigue and well-being of kindergarten and nursery school teachers.

